

## 組織的な若手研究者等海外派遣プログラム報告書

氏名： 嶋田 奈穂子	提出日：平成 24年 2月 3日
<b>東南アジア研究所における職名： 特任研究員</b> *右記の該当する職位に○をつけて下さい。(講師・助教・助手・ポスドク・博士課程学生・修士課程学生・学部学生)	
<b>派遣先の研究機関等(調査を実施した国名・機関名及びカウンターパート名)：</b> 国名：ラオス人民民主共和国 機関名：ラオス国立大学 カウンターパート：Dr Phout Simmalavong, Dean, FSS *派遣先の研究機関等の種類について右記の該当する箇所に○をつけてください。(大学・研究機関・企業・その他)	
<b>派遣期間：</b> 平成 23年 11月 5日 ~ 平成 24年 1月 25日 (派遣日数：82日)	
<b>研究活動等の主な内容(該当する番号に○をつけてください。複数可)</b> ①研究・実験 ②フィールドワーク ③セミナー ④インターンシップ ⑤サマースクール等の講習 ⑥学会出席 ⑦単位取得等 ⑧その他	
<b>研究活動の主な領域(該当する番号に1つ○をつけて下さい。)</b> ①人文学 ②社会科学 ③数物系科学 ④化学 ⑤工学 ⑥生物学 ⑦農学 ⑧医歯薬学 ⑨総合領域 ⑩複合新領域	
<b>派遣の概要(500~700字程度)</b> ラオスでの調査日程は、以下の通りである。 2011年11月5日 : 日本からラオス・ビエンチャンへ移動 2011年11月6日~11月20日 : ビエンチャン滞在。ラオス国立大学にて、調査の打ち合わせ、ビザの発行。 2011年11月21日~11月22日 : ビエンチャンからチャムパサック県へ移動、バクセーにて調査許可証発行。 2011年11月23日~2012年1月21日 : チャムパサック県コーング郡を中心に、調査活動。 2012年1月21日~1月22日 : チャムパサック県からビエンチャンへ移動 2012年1月23日 : 報告書の作成・ラオス国立大学へ報告 2012年1月24日~1月25日 : ラオスから日本へ移動・帰宅  調査には、チャムパサック県コーング郡文化局長Khamphai氏、副局長Udom氏がパートナーとして同行していただき、主としてヒアリングの補助をしていただいた。また、通訳として元東南アジア研究所研究員の虫明悦生氏、12月17日以降は、聖泉大学教授の高谷好一先生が調査に同行して下さった。 この調査に対して、ラオス国立大学社会科学部、チャムパサック県、コーング郡、コーング郡文化局に協力いただいた。 今回は、コーング郡114カ村のうち、49カ村を調査した。民族構成は、48村がラオ族、1村がラオ・タウン(モン・クメール系民族)である。各村での調査内容は、①村の基本情報、②精霊(Phi)にまつわる森林・鎮守に関して…有無、立地、構造物等の有無、禁忌・祭礼、昔の状況に関するヒアリング、③踏査(可能な村のみ)、地図作成、であった。 全ての村に鎮守が存在し、約半数の村で、それぞれの祭神(名前、出自、性格)、由緒、立地等についての明確な回答が得られた。	
<b>事業に係る研究成果(500~700字程度)</b> この調査は、ラオスの神聖空間(鎮守の森・精霊林など)を調査し、その形状や立地、地域との関わりを明らかにすることを目的としている。今回調査を行ったコーング郡の49カ村では、全ての村に、村の鎮守を祭る空間(Pu Ta)が存在した。Pu Taの立地については、明確な条件などは確認できなかったが、沼や大木、巨岩、寺院遺跡などを「聖なるもの」として捉え、その場所が鎮守と認識されている。形状や社会的位置づけについては、森林の開墾による鎮守の森林面積の減少や、集落の寺(仏教)の権威の増大に伴い、Pu Taの存在意義が薄れている場合がみられた。逆に、海外に居住する村人による寄付等でPu Taの建築物が大型化し、集落における存在意義が高くなっている場合もみられた。このように、コーング郡におけるPu Taのあり方は、消滅に向かうものと、規模の拡大に向かうものの二極化が起こっている。  祭神については、名前、民族、出自に明確な認識がある。興味深い点は、多くのラオ族の村で、祭神がラオ族とは異なる民族であったことである。カンボジア人、モン・クメール系民族、中国人など、ラオ族にとっては異民族である祭神を祭っていることになる。しかも彼らは、日常生活の細部に至るまでを、その祭神の好みや意向に沿うように意識し、努力している。こういった彼らのPu Taに対する考えや行動は、異文化や異民族を受け入れ、融和を図る「共存」という視点に立ってみると、非常に優れたものである。今後はこの点について考察を深め、彼らの思想を地域社会で再確認し、発信していく活動につなげていきたい。	